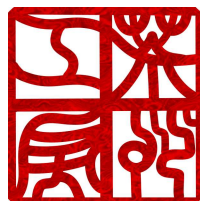


『竜が見初めし
美青年』
体験版



『竜が見初めし美青年』
～体験版

第一部：ハルと黒竜

月の光が洞窟の天井のかすかな割れ目から柔らかに差し込んできて、青年は目を覚ました。季節は秋に差し掛かったところで、裸の彼には肌寒いはずだったが、とぐろを巻いて眠りこくる竜の体温のおかげで、凍えずに済む。彼は先ほどまでこの竜に、たっぷりとその体を蹂躪されて、どす黒い精液を中出しされていたのをひとりで思い起こす。まだ肛門はぬるぬると変な感覚がして、腹に力を入れるとピュルッと残った精液が飛び出た。

青年は、もはや逃げようとはしなかった。この竜に、恋をしているから。竜も青年に恋をしているのかもしれない。彼のほっそりとした体を、そのたくましい前足と、更に重厚な後ろ足とでがっちりと抱きしめているのだから。何にせよ、青年は竜の体温と背中のでやかな体毛にうっとりとした感覚を抱きながら、まるでその竜のよき伴侶のように、もう一度頭と胸を竜の黒い体にあてがって、添い寝をするのであった。

◆一章「水神」◆

ハルは、瑞穂の国の立竹村とその隣町、八千俣の双方で随一の薬師だった。そこまで登りつめたのは農民だった彼を最真にしてくれた名医のナオマサのお陰でもあり、また彼の優秀な頭脳や実直な性格によ

るものでもある。しかもその顔立ちや体軀は細く端正で、特に切れ長の目やスンと細く筋が通った鼻は、彼の地位や明晰な頭脳を外見でもって立ち表しているようだった。町で診療と薬剤の処方をする彼を一目見ようと、世の中の恋多き乙女たちは恋煩いを本物の病へと発展させるほどである。

今、そんなハルはといえば、薬剤の原材料となる薬草や木の実、茸を探しに西の森へと出かけている。既にいくらかの収穫を背負い、いつもの休憩どころである泉のほとりで子水を掬い上げ、水筒に水を入れた。

その時、彼の耳に、いや全身に、低く野太い唸り声が響いた。後ろを振り返った時に彼の目に飛び込んできたのは、全身がぬばたまのように黒き竜。生まれ故郷の立竹でもその目撃例はあれど、どれも数世代前のものだし、彼自身はそれらをあくまで妄想の産物だと考えていた。あまりのことに目を見張るくらいしかできず、体が動かない中で、頭の中にとある伝承が思い出される。

”竜に会いては粗相をするな。さすれば豊作、さもなくば凶作”

竜は水神。その水神たる竜に粗相をすることは、すなわち集落を飢餓に陥れることと同じ。彼には今、逃げるかその竜を丁重にもてなすかの二択が目の前にあったが、もはや竜という存在そのものに束縛された彼に、逃げ出すことはできない

固まったままのハルへ、竜はいきなり距離を詰めた。体は蛇のように長い、その太さは頭と尾の方が細く、後ろ足のあたりが最も太いというように、抑揚があった。更に近くで見れば、鋭く燃えたぎる魂がごとき琥珀色の瞳に、牡鹿のそれよりもさらに立派で老成した角、そして背の方に生えそろった黒く長い体毛の美しさなどが目立った。特にその体毛がない部分を埋め尽くす鱗の輝きに、ハルは何とも言え

ないなまめかしさを感じた。

「ようこそおいで下さいました」

ようやく絞りだしたその声はかぼそかったし、笑顔もひきつっている。これでいいのだろうか。

体はなおのこと動かないが、一方で竜の方はその大きな頭をハルの体にこすり付けてきた。恐らく小突いたくらいだろうが、そのあまりに強い力によろける。そんなことはお構いなしにハルに頭をこする黒竜のせいで、ハルはついに背後にそびえたつ大樹に背をもたれることになった。すると竜はハルが止まったのを気づいてか、にわかに匂いを嗅ぎはじめた。吸われるたび、冷たい。

「あわ！」

いきなり竜が、その前足を使ってハルを掴み上げる。そしてそのまま、空へと舞い上がる。

「え、ええ、え」と、流石に戸惑いが隠せないハルは、なす術もなく連れ去られるばかり。頭では、竜への人身御供として毎年幾人かの少年少女が命を投げ出さなければならなかったという昔話を思い出して、ぞっとした。食われるのか。

それでも、何だか彼にはもはやどうでもよかった。これほど日々の暮らしからかけ離れた体験というのは、なかなかできない物だし、いまや自分は空を飛んでいる。下に目を向ければさっきまでいた泉と森。前方を見遣れば町があり、さらにその奥に生家のある村がかすかに見えた。もし食われるとしても、こんな夢見心地で爽快な体験を最後にできたのだから、悔いは無いと、不思議と心は雲のように安らかだった。

◆ 二章 「墨染」

「ここ……」

さっきまで正中にあった日が、いくらか傾き始めたころ。竜はようやくその長い空中飛翔を終える。断崖絶壁に一つぽかりと空いた竪穴にハルをおろした。もはや逃げることもままならなかったし、彼には脱走すら水神への粗相になると思われたので、そうした気持ちすらおこさない。そのかわり、必死に環境に慣れようと努めた。意外にも中はかなりの広さで、それこそ竜の巨体もすんなりと入る。上からは岩の割れ目から秋の日ざしがうらうらと差し込んでいて、ちょっとした隠れ家、あるいは木の上の小屋のように思えた。更に驚きなのは、その奥に赤い座布団があること。まさか竜が一々縫ったりしたものではあるまい。とすれば、これは人間からの奉納品かもしれない。壁際にはお神酒を入れるための桶があり、奥に見える雑多なものも恐らくは奉納品だった。

「ぼく、脱ぐん、ですか」

そうやって一通り竜の岩室 {イワムロ} を見渡すハルに、竜が近づいて服を甘噛む。しきりにひっぱるから、ハルはそう認識した。

「いま脱ぎますから」

せめてものおもてなし。ハルが水神にいい思いをさせなければ、故郷が飢饉にさらされるかもしれないのだ。そんな使命感に突き動かされて、ハルは急いで裸になる。思い出したように、首飾りも乱暴に切り取ってどこかに投げてしまった。

すると竜は満足げに、泉の時と同じようにして臭いを嗅いだ。今度は服がないからより冷たいし、くすぐったい。岩室は無風の密室に近かったので、彼のにおいがかぐその竜の体臭も、ハルには強く感じられた。すぐに思い出したのは薬屋の常連の、家づくりのゲンさん。あの汗にまみれた男らしい臭いと、一度だけ都へ赴いた時に乗った馬の体臭が混ざったような臭い。別に、くさくはなく、むしろ野生のたく

ましさが凝縮された香りとして、嗅いでいるだけで力をもらえるように思える。

竜はなおも臭いを嗅ぎながら、その長い体を器用に丸め込んでとぐろを巻いたような形になり、ハルを鼻先で小突いた。「あ」と、これまた弱々しい声を上げて、当然彼は後ろに倒れるのだが、背後にも回り込んだ竜の体が、寝具よろしく極上の柔らかさをもって抱擁をしてくれていた。

オスとケモノが混ざった臭い、それから柔軟で温かみのある竜の体に包まれて、一瞬、温泉につかっているように思ってしまう。うっとりしていると、竜が大口を開けた。これまでかと思い全身をこわばらせていたハルだったが、一向にその口が近づいてくる気配がない。片目を開けてみると、やはりまだ口は開いたままで、しかも微動だにしていなかった。

少しずつ緊張の糸がほぐれてくると、竜の開けっ放しになった口内のおいおいが、むわりと立ち込めてきた。肉が腐ったようなおいおいに、すこしだけ食用きのこの香りが混ざったような、異様なおいおい。最初はあまりの強烈さに鼻が曲がりそうだったが、なぜか二度目から、何とでもないといった風に嗅ぐことができた。しかもやはり、体臭と同じで嫌ではないのである。もしやと、ハルは竜の真似をして、口を大きく開いた。すると竜がここぞとばかりに、口内で唯一柔らかく、厚みがある舌を突き出して、勢いよくハルの口に突っ込んだ。先ほどのおいおいと共に、自分の体温よりもさらに熱い感覚。そして充実感を感じていると、その舌尖から液体がほとぼしった。喉奥にかかったために吐きそうになったが、分厚い舌がそれを許してくれるはずもなく、仕方なく飲み込んでいった。少しばかり舌に付いたその液体をなめてみると、甘さとほろ苦さが混じった、癖になりそうな味だった。嚥下したのを確認して、竜はゆっくりとその舌を退いた。

竜は全身をゆるやかに動かし、とぐろの位置や体の向きなどを改める。うねる体に流されるようにして、ハルの格好は、ほぼ寝ているのと同じくらい、地面と水平になっていて、首だけが起こされた状態となる。そして竜はやはり顔を近づけているほか、立派な後ろ足、そして人間で言えば股が、その首の真下に来るようにした。なぜそのような恰好をしたかは、すぐに分かった。竜の股の部分、横に一文字に割れた線から、ニョロリと尖った赤い性器が見えていた。ハルはそれを見た時から鼓動が早まり、血行が良くなって、さらに体が火照ってきた。胸がぽっかりと空いたようで、どうしようもなく虚しかった。先ほど飲ませられた、舌からの分泌成分がそうさせているのだろう。その気持ちを少しでも紛らわすため、そして水神様へのもてなしのため、彼はゆっくりと身を起こし、まだ先が出ているだけの状態の、竜の一物に顔を近づけた。人間の女すら相手をしたことが無い彼は、もちろん、人間以外を相手取った性交など経験があるわけではない。ただ、竜のそれはあまりに真紅で、流麗な形をしていて、指で触っては傷がついてしまいそうに思えて、舌先でちろちろと舐めることにした。ぺろり、ぺろりと最初は恐る恐るだったが、慣れてくるにしたがって、どんどん舐め方を心得てくる。臭いはほぼなかったが、味は塩辛かった。歯が当たらないように、それでいて舌の無作為な動きで、刺激を生むように。竜がこれで快感を感じているのかはわからなかったが、少し一物がより膨れ上がってきたかという時に、一度またとぐろのかたちをかえて、ハルをより股に引き寄せたので、どうやらこのまま続けろという意味らしい。

「気持ちいいですか？」

ハルがそう尋ねたのは、全くの無音が少しだけ恥ずかしかったからであり、竜の肉棒からちょろっと、透明な液体が先走ってきたからで

ある。それをなめとると、やはり塩辛い。だが、それ以上に粘性が強く、上手く飲み込むことができなかった。

ハルも、先ほどの竜の媚薬成分のせい、行動がどんどん大胆になっていく。どんどんとその体積を増していく竜のそれ。その根元の部分、横一文字の切れ目を両手でかき分けて、皮膚の中に隠れている根元までを晒して舐めしゃぶった。クツと、酸っぱいにおいが立ち上る。汗が堆積した、饅えたようなにおい。最初こそやはり顔を背けたいような衝動に駆られたが、それで冷めていくほどの興奮ではない。いや、むしろどんどん欲していく。体が、理性を上回って竜のにおいと味と、感覚を求めた。

そしてハルの奉仕の甲斐があつてか、その凶悪なマラが完全にそそり立つと、一度大きく拍動した。見事な流線形。ああ、と声を漏らしてしまうほど。根元が最も太く、そこから先端に行くにつれて、竜の体のように細くなっている。所々に血管が走り、また溝があり、そのどちらも捻れている。長さはちょうど、ハルの顔面と同じくらいで、太さは手首ほど。

突然また、そそり立った竜の「塔」が強烈に挑発的な臭いを放ってきて、ハルは眩暈を覚えた。自らの不肖の息子を見てみると、竜に呼応してか完全に隆起しきっている。それどこではなく、鈴口からはやはり同じように透明な汁を垂れ流しにしている、それはそれは恥ずかしいくらいに濡れてしまっていた。

「もしかして、僕を使って性処理を」

竜は大きく息をした。じっと見つめてくる。ハルはそんなことを自ら言ってしまうことに驚いたが、どうしても、腹の底から湧き上がってくるじわじわとした快感が、我慢ならない。遂には足、腰をもじもじと動かし、不浄の穴――肛門が、力なく開いてしまっているのを感じ取った。

「ぼく、ぼくは受け入れます」

竜の目と一物が、一層強く燃え上がった。

「ああ」

ようやく竜が動く。ハルを軽々持ち上げて、洞穴に唯一ある布製品、赤い座布団に仰向けにさせる。ハルは全てを理解したので、自分でお尻をくいと挙げて、そのじくじくと熟れた菊門を、誘惑の為にヒク付かせた。

「んああ！」

それはあらゆる感情が混じった故の、無意識に発せられた声。曇りなき快感の鳴き声だった。竜がついにその雌穴めがけて一物を、体を大きく揺るがしながら、突き立てた。当然ハルには自分の穴を触った経験もなかったが、今やかの手首もある竜の肉塔を、すんなりと受け入れている。潤滑油は竜が出す汁と、ハルの腸液。

竜の唾液の作用のせいで火照り、どこまでも熱ぼったく赤らんだ体を、竜が折檻するように腰をその長い体の一部を打ち付ける。ハルはその度に体が揺らぐ強烈な力を必死で吸収していたが、それに見かねた竜が前足で肩を掴んだ。それによってハルはさらなる快感を真正面から受け続けることになり、喘ぎ声から下品に乱れていった。一方、竜が自らの上半身を支えていた前足をそのように使ってしまったことで体重を支える事が出来なくなり、ハルの背中へとその長い首を置いた。だからハルは、前にも上にも、横にも後ろにも退けない。快感を逃がそうと必死にもがけばもがくほど、その動作はすべて快感を貪るかのように、意図しない刺激をもたらす。

ハルが身もだえする中、その快感で引き締まった腸内に強い快感を覚えたか、竜が低い唸り声を上げ始めた。腰を今までよりも一層奥にひいた。それで穴から肉棒が抜けてしまい、へなへなと下半身も地面

に付けるハルのことなどは一切気にせず、もう一度狙いを定めて、槍突きのように、一物を鋭く挿入した。その力は今までで一番と云っていいほど強く、とうとう全てがハルの穴へと誘いこまれた。ハルは、尻で竜の鱗のつるつるとした質感をも感じているはずだが、あまりの刺激と快感に、声を上げるまでもなく、口を尖らせたまま、体を突き上げる絶頂感のなすがままとなった。その時の肉穴の締め付けにはとてつもない力があり、竜もさすがに少しばかり出し入れがしづらそうではあったものの、その動作は滞ることがない。深く、低く、重い声を上げるばかり。

「やあああ」

久々に発した喘ぎは、もうか細く力がない。頭が気持ちよさで焼き切れたか、今の彼には意味のある言葉をはくことすらできない。ただ竜の玩具であり、蜜の詰まった穴であり、全ての性の衝動を受け止めることに精一杯なのだから。それでも、快感の上下、増減には体が逐一反応していく。今は緩やかな時だが、やがて激しくなる。竜の好みの動きが体に染みついて来た。

「あああ」

これが竜の早い腰打ち。細長い体をくねらせることによって人間では到底出しようもない、重い一撃が連打される。その一瞬一瞬に、鱗部分で尻の脂肪がたたき上げられる。もはや尻叩きと挿入が一式になっているかのような感覚で、それが止めどなく続くのだから、どうすることもできずよがり狂うのは必至である。

しかし、今回は一味違うように思えた。ハルの尻穴が察知する。竜の一物が妙に、腫れぼったくなっているような。拍動もかすかに感じられるし、摩擦かそれ自体の発熱か、とにかく燃えるように熱い。竜の発声も、いつの間にか苦しそうな声だった。

腰振りは依然として早い、少しだけ、ねっとりとした動作になっ

てきた。潤滑油である先走り汁がどんどん出てきていて、水音から察するに、ハルと一物の接合部には前後運動による泡がたんまりと溜まっているのだ。最初はパンパンという肉のぶつかり合う音だったのに、今やぐちゃんぐちゃんと、もう濡れそぼった布と布とが合わさった時になるような音になっている。

「んんんあ！」

ハルの頭にまで、竜の一物の膨張度合いが知れる。「いやああ」と、強姦される女のような声を上げて抵抗しようとするが、上から竜にのしかかれて、前へも逃げられないから、やはり今まで通り狂うしかない。そこで竜の腰振りがどんどんゆっくりになって、苦しげなうめき声がなくなったかと思うと――

どばん。

放出というより、爆発に似た感覚を、下半身が味わう。すぐさま直腸内が精液で満杯になって、ハルが必死に力を入れると少し液体が、肛門と竜のマラの間隙をぬって放出されて行った。ハルの知能は恐らく犬ほどに低下しているだろうから、もうどれくらい射精の時間があつたかは分からなかった。ただ、確実に言えるのは彼の直腸を全て精液が埋め尽くしたほどの量だったということである。

「え」

ハルはいくらか気を失っていたことを知って身を起こすと、自分の体とその股が見えて、尻からどす黒い液体がこぼれているのを見た。

「嘘、ていが……」と、「血」という一音も正確に言うことができないほどまだ呂律が回らなかったが、一応それを手に付けて確かめてみると、血ではないことがわかる。ただ、正体の同定はできない。黒竜の精液かもしれない。それなら納得がいく。竜はその体に似つかわしく、精液も真っ黒なのだと。

「水神さまあ」

何を思ったわけでも無かったが、ハルはとにかく呼びかけをした。竜はずっと見つめていたのだが、更に少しだけ首の角度を変えて、ハルの顔、体、全てに至るまでを視線でなめまわした。そして例によって大口を開けてハルにもそうさせると、もう何度目かわからないあの甘い液体の注入が行われる。しっかりとしつけられた子供のように、ハルの体はその液体を飲むがいなやすぐさま反応をはじめて、休む間もなく火照ってきた。もしやまた犯されるのだろうか、彼は自分の肛門をさするが、あれほど出し入れをされていたというのに、全く傷や痛み無く、むしろ穴の周りがぷっくりと牡蠣みたいに腫れていて、ぐずぐずに熟れていた。それに触れた手を目の前に持ってくると、さらさらの黒い液体と共に、自分の卑猥な穴が分泌したぬめりが絡みついている。

竜はそんな様を見て増々興奮して来たか、もはやハルが口で一物を舐めずとも一気に怒張させて、目の前のか細くて白い青年を押し倒した。今度はうつ伏せではなく仰向けの体勢で、竜が前足を人間のように入用いて足をつかき上げてくる。すると今まで口に入れていた長い舌をどんと肛門の奥まで入れていき、そこでまたもや液体を流した。ハルは顔を覆い、うめき声を上げるしかない。熱い。体の奥底から、本来雌が感じるような気怠さと快楽の熱。ただもう彼の穴は蜜を垂らす女性器となって、雄を誘う雌の臭いをまきちらすだけ。いきなりそこへ、竜が肉の矛をついていく。

「んんん！」

度重なる快楽をいやというほど享受してきたはずなのに、体はまだまだ男根を欲していた。竜のその性欲の塊がハルの肉をかき分けてぐにぐにと開拓していく。途中で何度も、付け根の太い部分が男の急所、前立腺を圧迫して、声を出さずにはいられない、内側から外側へ向か

う開放的な感覚を放出する。

竜は二度目だからか、あるいはこの体位がとりわけ好みだったかはわからないが、先ほどよりも早く、首をはじめとする上半身をハルの体に力なく密着させた。するとハルにはこの寝床に来た時に感じた竜の雄らしい、野生的で挑発的な臭いがとめどなく流れてきて、それら全てを鼻の奥、そして頭で味わうことになる。

どんどん発情すると、やはり快感や性感もどんどんとのぼって来て、遂には早々と果ててしまった。射精を伴う男の絶頂ではなかった。内なる快感が押し寄せてきて、体が受け止めきれなくなって生じる、女の絶頂。

それでも竜は止まることを知らず、ずんずん突き上げる。またもや前足で肩を掴んで、彼を肉の袋のようにして扱いはじめた。そうすると今度は彼の腫れあがった乳首と肉棒が、竜の首にこすれて、最大限の快楽をそれ以上に助長した。もう口で息をするほどに呼吸が乱れて、その度に竜の体臭が心を虜にして、穴と乳首の雌らしい快感、そして男根の雄らしい快感とが混ざり合って、体が壊れていく心地がした。

今やハルは目とか鼻とか、あるいは口、尻といったありとあらゆる穴から体液をとめどなく流していた。口の中が乾こうとすれば、竜がその苦しそうな様子を敏感に感知して、その度に口の中に大量の媚薬を送り込んだ。

ハルは度重なる快楽地獄の末、竜に対して水神様としての敬愛の念と、それ以上の愛情を芽生えさせていた。彼はこの目の前で豪快に自分を犯す黒き竜が、どんなに美しく優しい人間の女よりも、どんなに逞しく頼もしい男よりもいとおしい。

竜に恋をしてしまった。それは今の体勢を見ればわかる。自分でも気付いていないうちに、ハルは腕と足を竜の首の後ろに廻して、ぎゅうと抱きかかえている。全身で竜を味わっている。まだまだ欲しい。

もっと竜が欲しい。

一物による快感や、その圧迫感や、精液が欲しいのではない。彼は竜という存在そのものに恋をしたのだ。口の中は、異常なほどの性欲に支配された体が必要以上に分泌したよだれにまみれていたが、竜の舌が欲しくて顎をぐわと開けた。竜はそれに対して同じように大口を開ける。その口を開いた時の臭いがまたハルを悩殺するのだ。そのまま竜の舌を、小さな小さな人間の口と舌で迎える。甘苦い液体が出なくなってもなお名残惜しそうにしゃぶりつくすハルに感化された竜が、舌をも一物のように出し入れした。それが食道にまで入っていくものだから、二三度嘔吐感にさいなまれたが、その後はそれすらも気にならなくなる。むしろうっとりしてきた。

いよいよ竜の動きが粘り強くなってきて、長い胴を用いた腰振りが、最大限の強さとなってきた。ハルはもう考えることもしないで、体にすべてを任せきる。その肉穴は、もはや頭が何を思わずとも、出し入れされる雄の象徴によって授けられる感覚によって締め付けを自在に調節できた。今までずっとずっとハルは極楽浄土の快感と、竜の体温、こすれ合う摩擦、体臭などを味わい続けてきた。それでもまだ頭と心は感じるものの内容を変化させていく。無条件の絶対愛がさらに膨張して、ますます竜を抱きしめる手と足が力強くなった。それで竜もさすがに呼吸が苦しくなって、喉の筋肉を最大限に使って気道を確保しながら、そのせいでいよいよ野太くなった喘ぎ声をまき散らした。

そして、竜はひと時、本のひと時だけ、黒い「華」をさらりと咲かせた。

ハルはその竜が作り上げた恋心を、ジクジクに熟れた穴でしっかりと受け止めて、全身全霊で気持ちを送り返す。するとハルは快感を超えた感覚、すなわち悟りの心地に触れた感覚がして、前身の毛穴が全て開いて、体を構成するすべてが絶頂して打ち震える思いをした。感

覚を束ねる事が出来ず、自我の垣根も無くなる。自分と竜、二つを分けている皮膚などとうにわからない。竜の感覚と体を味わい、竜へは自らの感覚と体を分けた。そうして二人はゆるゆるととろけあって、血の一滴にいたるまで全てを交換し合ったあとに、深く濃い眠りに誘われたのであった。

◆ 三章 「変貌」

ハルがここに来てから幾日経ったのか、正確な数は忘れていた。でも、まぐわいさえ出来ればいいのだ。それよりも、このところ竜の精液や甘い媚薬のせい、か、どんどん体に変化していることの方が気になっている。少しずつ皮膚が硬くなっていて、一部には竜と同じような深い黒の、あでやかな体毛が生え始めている。尾骶骨のあたりに痒みを覚えたと思えば、そこにはちょっとしたしこりが触れていて、数日後には小さいながらも立派な尻尾として触れた。顔だって、鼻の下あたりがどんどん前に飛び出してくる。全ての歯が抜け落ちたかと思うと、つぎつぎによく肉が切れそうな、りっぱな裂肉歯が生えそろう。そのころになると痒かったお尻も立派に尻尾が形成されていて、また眼の上にもまるみがある角が、掌くらいの大きさになるまで出てきていた。

最初こそ慣れない異様な感覚に、体の奥底をかきむしりたい思いをしたものだが、その度に黒竜がたくさんあの液体を飲ませて、性交に及んだので、耐えられぬものではなかった。今ではハルは、人間とは思えないような容貌をしていたが、注意深く見れば、かすかにかの端正な顔立ちと、透き通るような切れ長の目が垣間見える。故郷や師匠のナオマサにはすこしだけ未練があったが、愛する竜と似通った体を手に入れられることは、それをはるかに超える喜びだった。どうせな

ら、この体を雌竜にしてくれても良かったと思ったが、竜にそこまでの力はなかったか、はたまた雄としての彼が好きなのか、とにかく今のハルは少し小柄な、二足歩行の竜の完全体になることを夢見て、今日も今日とて、恋の相手の竜に種付けをされるのである。

第二部：レイと白竜

瑞穂の国の西方、秋津地方に位置する町――八千俣には、天文博士が一人いる。その名を慧委〈エイ〉と言う。彼には一人息子がいる。名を怜〈レイ〉と言う。

天文学や占星術は一国の先行きすら定めるほどの秘術であり、高度な学問知識が要求された。それゆえレイは幼少期から英才教育を施され、未だ齢十七にしてその頭脳は明晰でいて怜惻。さらに彼は眉目麗しい美男子であった。若干釣り目がちな両のまなこはまるで硝子細工のような切れ味で、くっと筋立っている眉・鼻筋・口は端正且つしっかりとした芯を示す。色白の肌には程よく肉が乗り、引き締まった四肢も美しい。

もはや彼の人生は、下ることを知らない。

◆四章 「竜人」

散歩がてら寄るにしてはいささか遠いところに、彼の気に入っている場所がある。

うらうらとした、のどかな秋の昼。緩やかな坂を気ままに上りながら、じわり汗ばんだ首筋に手をやる。汗をぬぐって、また進む。

獣道特有の土の香りと、草がこすれる音に加えてだんだんと水音が

聞えてきた。たどり着いたのは浅い川。さらにそこから東へ歩いて、水面と岸に目を凝らす。

「あった」

何の目もない事を確認しつつ荷物をおろし、まずは水を掬った。生き返ったような心地と共に、何度もここに浸かった時の、何とも言えないあの蕩けた感覚を思い起こした。

八千俣は、古くは湯治で栄えた土地。それゆえ集落内外にも多数の温泉が湧き出ている。レイが今、裸で浸かっているのもその無数の温泉の一つ。但し、ここは川の中に噴出口があるという点で珍しい。それを石である程度堰き止めておいて、水で湯を調節する。だから一年中好みの湯加減を調節できた。

適当な石を枕にして、川底に寝そべる。歩いて少し火照った体を冷やすために、今回はぬるめのお湯を味わう。星の測量で知恵ぼてりした頭を水にさらす。意識しなくても、体の至る所をさらりさらりと清流が流れていくのが感じられて、心地よかった。

日焼けも傷も全くレイの生肌は、まるで皮をむいた玉ねぎのようなつややかさを誇っている。

今寝そべっている川には魚、川虫はもちろん、そのほかもろもろの微細な生き物だっている。そう考えると縦横無尽に体を駆け巡る川の流れ、絶え間ないせせらぎには生命の息吹が感じられて、日々感じていた緊張や人付き合いによる嫌なことも、すっかり忘れられた。

しばらく寝そべり続けて完全にまっさらになったその空白の心で、突如として異様な風を聞いた。

「鷹か？」と一人ごちてから、それにしては音程が低いし、なにより音が大きすぎる。妙に思いその方角を見ると、逆光によって真っ黒にしか見えない人影が、こちらに高速で接近しているのを見た。そう、それはまぎれもない人であった。

あわてて立ち上がり、立ち眩みを強引に押し殺して川岸を目指す。しかしその影はもうすでに、日本の足でしっかりと目の前に立ちはだかっていた。

「やっぱり、かわいいね。空からでも、きれいな顔立ちしてると思ったんだよ」

内容が頭に入ってこない。その人物は、竜人——あきらかにそうとしか言えない存在だったし、体格は偉丈夫よりも一回りも二回りも大きい。頭には角、背中には巨大な翼が生え、全身を黒い鱗と毛で覆われたその姿は、レイの思考を止め、歩き方を忘れさせ、ただ赤子のように見つめることしかできなくさせてしまった。

「綺麗な肌……、僕も昔はそうだったんだ」

「ひっ」

頬をいかつい手の甲で撫でられて、われに返る。ばしゃばしゃと水流を蹴飛ばしながら数歩後ずさる。

それから言葉を反芻する。昔は……？ 妙な言葉に少し引っ掛かりはしたが、意識はまたもや相手の外見に向けられた。まず目に入ったのは横に広がっていた状態からきれいに折りたたまれていく翼。それから恐らく尾骶骨のあたりから生えているだろう尻尾が、黒々と光る鱗にびっしりと覆われていて何とも爬虫類的な印象を抱かせる。ただ、異様なほど人間味のある柔らかな眼光、それに二足歩行であることが、彼が人と竜の合いの子——竜人なのだろうと再び理解させた。

「でも人間の肌って、なんか弱くて、頼りないんだよね」と、自らの腕をさすりながら竜人が言い放つ。その声はとても低い。ゴロゴロと、喉の奥で落石が起きているかのような、奇妙ではあったが耳障りではない声。鼻面が少し長いせいか、発音はあまりうまくなかったが、聞き取れないということはないし、音の高低は完璧な人の言葉だった。

レイは勢いよく川底を蹴った。蹴って走り出す。水の抵抗ではし

りにくい。細かな石粒も裸足には痛かったが、些末な感覚になりふり構ってはいられない。飛沫をあげながら驀進する。

しかし竜人は早い。数秒のうちに上空へ飛翔すると、勢いよく宙を滑空した。猛烈な速度で低空飛行して、水に足を取られていたレイの胴を黒い腕でしっかりと掴んだ。

「私を……、離せ、このけだもの！」

「いやだよ。せっかく捕まえたんだもん。ご主人様のつがい」

「はあ？ なに、いってる……、んんっ！！」

レイがもがけばもがくほど、その素肌に竜の鱗の感触がつぶさに伝わってくる。まだ誰とも肌の重ね合わせをしたことがなかったレイにとって、この接触は心のそこから気味悪いものを感じられた。

竜人は、強く強く抱きしめながら、まず頭をもたげて、青年の首筋のにおいを嗅いだ。鼻の穴も人間にとっては規格外だからか、吸う鼻息ですらヒヤリとした。

「ああ」

うめき声を漏らして、ますます胴を抱く力を強める。そしてその手先を器用に使って、レイの胸板をまさぐりはじめる。この屈強な指先は、男の胸の小さな粒を見つけると、意外にも繊細にこねくりはじめる。

「わっ、や、やめろお、そんなとこ、なんのっ、つもりだ」

最初こそ驚きと恐怖によって単なる刺激にしか感じられなかった責めも、丹念でねちっこい触り方が功を奏して、レイの体もだんだんと、むず痒さに次いで甘い快感を受け入れ始めた。二つの指で、乳輪をなぞりながら同時に乳首をくるくると触れる。それに反応して、乳頭と性器も隆起してくる。

「や、だ……嘘だ」

レイもだんだんとその状況を理解しつつあるが、理解すればする

ほど身の毛がよだつ思いがした。得体のしれない怪物にとらわれて、手籠めにされてしまっている――抵抗できない自分が何とも情けなかったし、それに反応してしまう体などは自分の物と認めたくない。

上半身をくねらせて、掠れた声で弱々しく抵抗するレイ。手足もあががに拒絶しているのに、ぷっくりと腫れあがった乳首は、むしろ竜人の無骨な指を欲しがるようにして膨れ続けている。抗おうと身をよじる度に、それがまた乳首への新たな刺激となって、快感が全身を巡っていく。よろめいて浅い水面に足を突き刺すたび、大げさな水しぶきが散る。

「たまらないよ、君、誘ってるんでしょ」

「違うっ！ い、良いように解釈するな怪物め」

「こんなに勃ててるのに？」

「うるさい」

その反抗的な返答にますます心が燃え上がった竜人は、いよいよ自分のモノも完全に隆起させて、レイの腰や背中にこすり付け始めた。背後にぴったりくっつきながら行われる、肌と肌、肌と生殖器を触れ合わせるその動きによって、レイは相手の体臭を嗅いだ。大体は獣特有の野性味あふれるにおいだったが、その中に仄かに土臭さと汗の気配が顔をのぞかせている。自分が一日に二回は体を洗うような性格だったからか、そのような強いにおいを近くで味わったことが無かったが、不思議とすんなり受け入れることができていた。あるいは、においはあまり問題ではないと思わせるくらい、欲望の捌け口となるのが嫌だったのかもしれない。

「僕もねえ、昔は人間だったんだよ」

「放せ、その、汚らしいものをしまえ、ケダモノ」

「おとなしくしてれば、君も竜になれるんだよ。こんなに素晴らしい事ってないとおもうけど」

竜人はレイの言葉に全く耳を傾けず、自分語りを始めた。

言葉をまとめれば、彼はもともと立竹出身の薬師見習いだったが、薬草を収集する最中、黒竜に見初められたのだという。見ただけで偉大な存在と実感した彼は、何を抵抗することもなくなすがままにされ、巣穴に連れ込まれ、種付けをされた。

「竜って不思議な存在で、雄しいないんだ。いや、正確には性別が無くて、竜は全個体がほかの生物を孕ませる能力を持ってる。それで他の生き物に種付けすると、その生き物が竜になっていくってわけ」

この竜人は竜化の最中で、今はちょうど人間と竜が半々の状態である。だから人間の言葉を話せるし、なまじ竜になりつつある元青年ということで、健全でいて純白な人体への羨望というものがあつたのかもしれない。

「は、あっ」

「かわいい」

レイの頭を、俄かに快感が侵し始めていた。じわじわと、遅効性の毒薬のように蓄積していた甘ったるい蜜。いくら感じまいとしても脳裡にこびりついて離れないそれは、逃げ場を失って彼を襲い始めたのだ。段々と力が抜けていく。その後ろで獲物の脱力を実感する竜人。遂には体を支えるだけの力でレイを責められるようになってきたのを見計らって、竜人は青年を川辺に横たわらせた。上流に温泉があるのだろう。川の水が憎いくらいにちょうどいい温かさだった。

それで、レイの頬は燃えていた。息を荒げて、四肢をゆっくり、そして確固たる意志で動かそうとするが、容易に取り押さえられてしまう。

「綺麗な顔」

「やだ、来るな……。来るなあ！！ お前なんか……。存在を町に言いふらして、捕らえて検断してもらうからな。許さない」

「うんうん。もういい？」

「な、なにを、む`う」

ひとしきり話させてから、竜人はその大きな口を見せた。ぐわと開かれた口内には奥深くまでびっしりと牙が生えそろっていて、レイは思わず口を半開きにした。隙を見て人間離れした分厚い舌が、口内を蹂躪し始めた。舌尖同士が触れ合う。レイは下がるがこれ以上退くことができない。それでも入り込んでくるので、とうとう全面が接触して、ナマコのような、ぬめっとした塊が口を支配した。

「わっぶ、や、やいえろ、おえ」

じゅぶじゅぶと舌を出し入れするさまは、あたかも恋人同士が足を絡め合っているようだった。そう思った竜人が、実際に足を絡ませていく。人に比べれば一回り二回り長く太い足が、青年の柔らかな足を上下左右から押しつぶす。ほんのり肉がのって、ややむっちりした足。そしてついに竜人は全身を使って獲物に覆い被さった。鱗という鎧をまとった堅い皮膚と、生身の人間の柔肌^{にきはだ}が、不規則にこすれ合う。そのたびに、舌と全身の表面が官能的な感覚を生む。レイの心は受け入れたくないのに、頭が快感を味わっていた。

「う`え、おぶ、っやら、やあ」

口を放しても、もはや竜人は何を話すこともなく、ただただ湧き上がる本能に任せて腰を振り出した。この青年は、主人である竜への貢ぎ物——だから傷をつけてはならない。しかし腹の底から煮えくり返る精力は、とどまることを知らない。それで彼は自身の肉棒を彼の腹に強くこすり付ける。そこに理性は無い。堰を切って乱れた濁流のように、ケダモノの欲望が頭を染め上げている。

竜人が体を密着させて自らの欲望の膨らみを慰めているというこ

とは、また同時に、レイのそれも竜人の厳つい肌に擦りつけられるということになる。その上、それは「竜の腰ふり」。力強く、早さもあった。レイのそれより一回り大きい肉棒と、絶妙に弾力のある硬い皮膚、そしてその人間離れした動きに、彼はなすすべもなく射精のおもかげを感じる。

「あっ、あ、あ、あああ」

言葉を話す余裕もないレイ。獲物がやっと手のひらに収まったことを悟って、竜人はますます鼻息を荒くした。半開きになった口に、またあの舌がねじ込まれる。極太で、粘液にまみれたそれは、まるで二本目の生殖器のように縦横無尽に動き回り、人間の狭っ苦しい口内を犯していく。偽りの交尾にまっしぐらの竜人は、やがてか弱い人間への配慮をも忘れ、自分の全体重を青年の体に押しつけていった。口は舌で塞がれ、鼻はその唾液でべとべと。さらに胸もお腹も上から押しつけられ、十分に息ができない。そうして意識は朦朧としてきていたが、同時に激しさを増す腰ふりが、彼の性器を限界にまで追いつけた。

「うあ、あ、くる、んおお！」

息苦しく、暑苦しい。でもそれが気持ちいい。息をすることすら忘れて、小ぶりの男性器を小刻みに震わせた。同時に精液が細長く、細切れに放出される。五六回で落ち着きはしたものの、いつものように快感がなくなって冷静になっているようには思えず、むしろさきほど乳首を弄られていたときに感じた甘ったるい心地よさが体を埋め尽くした。

温かな川の水に浸かりながら、大きな雄に腕っ節だけで手籠めにされる感覚を、レイは今、脳裏に刻み込まれた。とろとろと、蕩けた顔しながら舌を出すレイをみて、竜人は、このかわいらしい獲物が射精にいたったのだと知る。さらに股に感じる粘っこい液体とそ

の独特のにおいに惹かれ、彼は少し起き上がって、自らの手で男根をしごき始めた。

「ううん、ほお、お、すごいいいよお、そのキレイな顔、もっと見せて」

レイは先ほどの呼吸ができなかった時間と射精で、もはや意識すら飛びそうだった。胡乱な目つきに、紅潮したほお、深く喘ぐ息づかい。病人のようでもあったが、その弱さに惚れた竜人の手は、ますます早くなる一方である。そして、レイがやっとのことで目を合わせて、虫の羽音のようにか細い声を上げたとき、竜人は膝立ちになり、その太い肉棒を、顔に向けた。素早くしごいていてもわかるほどには存在感のある亀頭と鈴口。レイは何か直感的なところで、射精が近いことを察した。ひとときだけ、ぷっくりとした雫を形作る先走りに、パンパンに腫れ上がった亀頭、そして会陰の締め具合、睪丸の持ち上がり具合など、すべての射精の兆候が、彼の頭には強烈に遅く認識されている。

「う`うう、でる！ うおおお、う、うけとめ、ろおおお`」

レイの腹の奥底を轟かせる声で、竜人は果てていった。太い肉棒からは、これまた野太く、濃密でいながら「黒々とした子種」が塊となってほとばしる。一度に飛び出る量もさることながら、その痙攣は優に百を超えていただろう。ずっしりとして絡みつくようなそのねばっこい黒汁は、おびただしい量をもって無抵抗のレイの頭、顔、首、鎖骨、腹、そして彼の性器にまで飛びついて、ぼたぼたと川に落ちる

色と量以外はほのかに血生臭いくらいで、人間のそれと何ら変わらない。それでも黒々とした精液というものには本能的に嫌悪してしまいそうなものだが、今のレイにはそれをいやだと思ふ気力もない。

すると、これほど射精しておきながら、竜人は深く呼吸をしながら姿勢を立て直し、そのまま自らの精液で厚塗りされたレイの一物を、大きな口に頬張った。

「ひあえ、や」

少し固さが衰えてきた頃だったが、彼の舐めでそれはまた芯を取り戻した。手は再び乳首に添えて、そのまま竿に舌を巻き付けたり、頬をすぼめて吸い付くなどしていると、レイは言葉にならない呻き声を上げ、竜人の口内に「潮」を吹き出し始めた。竜人も動揺したようだったが、その大きな口ですべてを飲みこむ。

「ふふ、もう、骨抜きだね」

不敵な笑みを浮かべたあと、竜人はレイの体を丁寧に川で洗った。昼下がりの陽気と清流に心を奪われて、彼は深い眠りについていた。

◆五章 「黒白」

ささやかな和毛の、細かく肌を刺激する感触が気持ちいい。風が、ごおんごおんと籠もった音で響く。心地よいまどろみがある。くぐもった風音が聞こえる。ふわふわの感触がある。

自分の寝床でないことは確かだったが、ここがどこなのかを知りたいと思えるほど冴えてはいなかった。さわさわと、しばらくはそんなすすきのように細かい肌触りに酔いしれていたが、ようやく意識を集中させて、その正体を捉えることができた。

それは白い、何らかの毛皮だった。首をもたげると、前も横も、ぐるぐるとその毛皮が取り囲んでいる。生暖かいそよ風に違和感を持って振り返ると、竜に睨まれた。

鋭い碧の目線が突き刺さる。

声すら出ない。

そうだ、自分は竜人に手籠めにされたのだ。おぼろげに記憶は蘇ってきたが、しかしそうだからといって、それが目の前の「生ける伝説」の存在を納得させるには至らない。驚異的で、信じがたい存在であった。

竜は水神。今でも田舎では竜神信仰がさかんな集落もあるらしいと知識としては知っていたが、それは単に創作であり、信仰であり、御伽話じゃなかったのか。

レイに鋭いまなざしを向けた白い竜は、深く野太いうなり声を上げる。腹の奥底にまで響く声には、遠雷に似た迫力があつた。もしや、先ほどの竜人の「ご主人」というのはこの竜なのか……？

白竜の威容と俄かに振り出した秋雨の気配を前にして、レイの眠気は最早ほんの少しも残っていなかった。

「おま、え、お前は、何で私をこんなところへ」

息が詰まる切迫感。やっと出た声は、細すぎて自分の声でないようだった。今まで味わったことのない覇気に気圧されて、さらに竜はその言葉をとことん無視してこちらへ顔を近づけてくるのだから。

体つきは、レイが知る蛇のような見た目の竜とは少し違い、どちらかと言えばイタチや首の長いアライグマのような、胴長短足の体型に近かった。洗練された頭部の角と鱗。そこから首と胴体は徐々に太くなっていき、腹から後ろ足と臀部にかけてがもっともふくよかだった。見れば見るほど、竜の顔や体は完璧そのもの。折りたたまれている翼にもゆがみや傷一つない。それどころか汚れすら見当たらない体毛と鱗には、うっとりとしとれてしまう。彼は思った。竜の造形美は、夜が深けても見飽きることのない、あの星空に似ている、と。

見入ってるうちに、いつの間にか竜の巨きな顔は、その体に惚れ惚れしているレイの首筋にあつた。あの竜人みたく、竜も鼻を鳴ら

してにおいを嗅いでいる。体臭が何か一種の判断材料なのだろうか。一つ一つに考えをめぐらしていくうちに、今度は柔らかいものが首筋から頬にかけて這っていった。舌だ。舐められたことに気づくとすぐ、潔癖の気がある青年は体を震わせて、竜の体から這い出ようとした。結果、その足を掴まれて強引に引き戻され、どすのきいた唸り声――落雷の如きとどろきをもって怒りをぶつけられる。竜の芸術作品のような繊細な顔が、しかめ面をしたせいで老木のごとき無数の皺で埋め尽くされていた。瞳はまるで、緑の炎のようだ。

そうして竜にされるがままの「おもちゃ」になっていると、ふと、異臭がした。強烈ではあるが、刺激は少ない。饅えたにおいも微かにあるようだが、だいたいは蜂蜜のような、奥深く、熟成された印象がある。決していい香りとはいえないものの鼻の奥にこびりつくようなその独特の風味が、しだいに頭の働きを鈍らせていった。だから、今しがた腕に触れたこの湿っぽいものが白竜の性器だったことにも、一拍おいて気づくのである。

「わっ」

思わず手を引く。同時に雷が落ちた。雨音がどんどん強くなっているが、不思議と雨には濡れない。ようやくあたりを見廻して、ここがかなり大きな岩室であることがわかる。湿り切った重い空気に、白竜の性器のにおいが混じる。竜はそのいきり立った一物を鎮めて欲しそうに、腕や腰にこすり付けてきている。またあの憤怒の形相を見せられてはたまったものではないレイは、嫌々ながら指先で触れてみた。それは、まさに肉棒。自分のものとは違って、竜のものは根元から先端まですべてがほぼ同じような太さでいて、しかも先端の龟头部分はぷっくりと膨れて一回り太くなっている。まるで獲物の中に射精をしたあと、その精液を一滴たりとも無駄にさせないための蓋のように思えた。

両手で包み込むと、その大きさや重さがずっしりと伝わってくる。再び怒らせてしまえば今度こそ何をされるかわからないから、レイは自分の腕と同じくらいのそれを優しくなでていった。すると、こんなにも剛直でいて雄々しいマラなのに、早くも鈴口から透明な汁が垂れてくる。竜の気持ちなど表情などからはほぼわからないものだが、この反応からは、酷く興奮しているのが丸わかりだった。今目の前にしているものはこんなにも濃密で蠱惑的な「臭い」を放つ男性器なのに、しかも自分は、先ほどの竜人がしてきたように犯されるかもしれないのに、レイにはこの興奮のしずくを垂れ流す肉棒が、何とも愛おしく映った。

「うっ……」

白竜は横たえていた身をけだるそうに持ち上げ、ずっしりとした下半身からそびえたつマラを、正面に持ってくる。

「もっと、して欲しいのか」

当然返事はなかったが、竜の深い緑の目に見つめられると、奉仕することが自然の摂理のように感じられてしまう。海に波が立つように、太陽が東から昇るように、人は竜の一物を気持ちよくするのだと。

鈴口からぷっくりと滲み出ている汁を龟头から下の方へと塗り広げる。上から下へ、根元から、先端へ——その繰り返し。

見れば見るほど、手で触れれば触るほど、その形が、いかにほかの生き物を屈服させることに特化したものであるかを理解させられる。しごくだけで、その「手」すら快感を覚えるのだ。金棒のような重みと、人間でいうちょうどカリの部分を取り囲むイボのような突起物、そしてぬらぬらと赤黒く光る表面に走る太い血管は、力強くうねる松に似た荒々しさを湛えている。

白竜がふと、喉を小さく震わせた。彼も快感を得ているのだろう。

レイは、竜の先走り汁を潤滑油代わりにして、さらに手の動きを早めていく。速度を速めると、筒状の男根の表面に点在する突起や血管が一気に感覚を刺激するから、ますますレイが受ける刺激も強くなる。ふと、これで貫かれた「雌」はどうなるのだろうかと考えて、また、すぐそれが自分かもしれないと思って、身震いする。これほどのものが、竜のあの肉体から繰り出される力で打ち付けられたら、どうになってしまうのだろうか……。

その時、洞窟にある唯一の口から、規則正しく風を切る音がした。白竜も思わずそちらに眼差しを向ける。すると、一瞬の稲光の後、巨大で神々しい影が姿を現にした。黄色い目の、黒い竜。それに続いて、先ほどレイを犯し、おそらくここに運び出した張本人——あの竜人が入ってきた。

「誰がいる?!」

彼の驚きようからして、どうやら竜人の主人というのはあの黒竜のようだった。そして、おそらくこの白竜は、彼らの留守中にレイを見つけたのだろうか。レイが黒竜のつがいとしてここに眠らされていたのを知らずに。

「お、お前、さっきの!」

「君は、なぜ竜と」

目を合わせて初めて気付いたが、黒竜も竜人も、絨毯や枕、布団などの敷布を抱えていた。町からかすめとってきたものだろう。しかしなぜ。レイには疑問が絶えなかったが、それは黒竜にも、白竜にも、竜人にとっても同じ事。今しがた洞窟に入ってきた「二匹」は、とりあえず手荷物を降ろし、レイと彼に奉仕させていた白竜に近づいてきた。

「ご主人、この状況は」

黒竜がうなり声をあげると、続いて白竜も静かにうなり始めた。

重厚な声の応酬がいくらか続いたあと、竜人はその意味を理解できるようで、こういった。

「白竜は、君をさきほど見つけたらしいね。君を僕のご主人のつがいだとは知らずに横愛慕……。僕たちが先に囲い込んでおいたつもりだったけど、確かに魅力的すぎる君をおいてけぼりにしてしまった僕たちにも非がある。だから」

そこで一度、これ見よがしに唾を飲み込み、竜人はするりとレイの真横に近づいた。そして色っぽく舌を出しながら、頬を触り――「僕のご主人様と、その白竜で、君を犯す。君がご主人を選べる」その宣告で、レイは血の気が引いた。

たった今、横に寝そべる格好で、前を白竜、後ろを黒竜に陣取られていた。どちらも体表には柔らかな体毛が生えそろっており、少し動くだけでもその細やかな刺激が身を震わせる。竜たちは、まだ何もしない。いつ行動を起こすかわからないその間がとても怖かった。何をされるのだろうか。何が行われるのだろうか。二体もの竜を一度に相手取ることなど、人間に可能なのだろうか。心臓が、喉から飛び出そうだ。

「んぐうっ！！？」

それからいきなり、レイの後孔に鮮烈で鋭い痛みが走った。黒竜の一物が、未開の締まりきった穴めがけて一気に闖入し始めていたのだ。一度腰を動かしただけでは、先が指の節ほどしか入らない。しかしそれをいくらか繰り返せば、無理矢理ある程度は入れ込むことだって可能だろう。この激烈な感覚に耐えられればの話ではあるが。

「んんん」

その様子を見て、白竜がレイの口の中にそっと舌を入れた。分厚くて長い舌。ぬめりとした唾液に混じって、それより少しぬめりけ

のある、甘い液体が放出される。それすら理解できないレイは、全身を震わせながら、ただ必死に痛みに耐えて、耐えて、耐えようとした。

「ああああゝ！」

レイは白竜の胸を両手で押し上げ、舌を口から吐き出し、そのまま白竜の首あたりへと飛び出した。

「や、やだ！ 最悪だ！ 何でこんなことするんだ」

尻を左手で押さえながら、這いつくばって、洞窟の奥底——布団や布が押し詰められている方へと逃げていく。壁を背にしながら、恐怖で涙を流していた。

「お前たちは私をどうしたいんだ！ 苦しめたいのか、こ、殺したいのかばけもの！」

なおもむせび泣きながら、不満と恐怖を心の奥底からひねり出す。もし竜たちに感情があるならば、その場は明らかに白けてしまっていた。竜人がそろそろと歩きながら近づく。

「やだあ、やめろ………」

「君のペースでいいよ。大丈夫。ご主人、ちょっと君が魅力的すぎたのと、競争相手がいるって事で、がつついちゃったみたいだねごめん」

「来るなあ………」

竜人はその忠告を無視して、怯える哀れな青年を優しく後ろから抱擁した。尻を押さえていた指先には、鮮血が見える。

「大丈夫」

耳に吐息がかかったかと思えば、もう耳全体が竜人の口の中におさめられていた。

「ひい！」

ふたたびあの感覚が思い起こされてしまう。体中をまさぐられ、

乳首を刺激されながら、口内も男根も犯され、無様にいつてしまったことを。それが、竜にされるとなれば、その快感は桁違いなのだろう。いつの間にか首を強引に後ろに向けられて、口付けもしていた。こんな仕打ちをされたのに、痛みも恐怖も、いつのまにか嘘みたいに消えてしまっていて、彼の体が、竜を求めてしまっているのを感じる。

「竜のキスには、媚薬成分と、全身の筋肉を弛緩させる効果があるんだよ。だからほら……、行こっか」

滑らかな声に誘われ、無意識に立ち上がる。ふらふらと、覚束無い足取りで、いつの間にかまた二体の竜の正面に来てしまっていた。黒竜は長い体を折り曲げて、顔の真下に生殖器を持ってきていた。白竜はその重そうな体を重厚な後ろ足だけで持ち上げて、これまたレイの正面にそれをむき出しにしていた。レイは、目の前に存在する圧倒的な雄性和威容に屈服し、へたりと地面に尻をつけて座り込む。

すべきことは絶対的に一つだけ。竜のこの肉棒を掴み、手で柔らかに包み込み、上下する。そして表面を舐め回し、口が開く限界までそれを咥えるのだ。その最中、五感で感じ取れるすべての感覚が、それはそれは暴力的であった。塩辛く、そして酸っぱい男根は、舐めようと顔を近づけただけでクツと鼻を刺激する膣えた臭いをまき散らしている。またそれを頬張れば、さらに強烈な味と風味、そして表面の些細な凹凸が、顎の上や舌をなぶるようにして口内を犯してくる。自分が動いているのか、動かされているのか、それとも竜たちが腰を前後させているのか、それすらもわからない。ただ無我夢中でその性の象徴を舐めしゃぶり、しごき、竜を満足させる、それが生きるすべての目的のように思っていた。

「いいなあみんなして気持ちよくなって。僕も混ぜてよ」

「何を、する」

レイの腰が、竜人にがっちり驚づかみにされた。竜よりは小さめだが、それでも人間のそれより一回り大きな手によって、ひょいと持ち上げられた腰。ごくごくたやすく足も肩幅程度に広げられ、むき出しになった菊門が口に含まれた。

「はあ、あ………」

脳全体を染め上げる凶悪なおに、それを口で奉仕するときの、唾液の音。それだけで壊れてしまいそうなのに、さらに後ろの穴を執拗になめ回され、ふやかされ、墜ちていく。

「もうひくついてる」

「ひあ、んあ………」

「舌も簡単に入るよ」

体内へと潜り込む竜人の舌と、二本の男根を前にして脱力しレイは、尻を突き出したまま上半身を床に付いた。その様子を見て、すかさず白竜が青年の下がった顔を持ち上げ、長い舌を半開きの口へと差し込んだ。またあの液体が流れ込んでくる。あの、甘ったるくて、頭の中にこびりついてとれない液体。黒竜も、にわかに舌先から粘液を分泌させながら迫って、レイの口内はいっぱいいっぱいになった。息をするのもままならないくらいに舌が詰まっていて、しかもあの媚薬液が絶え間なく注入されているのだから、抵抗する気力は完全にそげて、心と体はどちらもふやけていった。

口元からあふれ出た唾液と媚薬の混ざった粘液が、糸を引いて地面に垂れた。その濃厚な滴ひとつ落ち、またひとつ落ちるたびに、妙な感覚も一緒に腹の底に集まっている気がした。男であるから子袋は無いはずなのに、あたかもあるような感覚。腹が、ずーんと重い。なめ回されている穴も、触らずともわかるくらいにはぽっかりと開ききっていた。暑い。いや、体が、熱かった。熱ぼったく火照

った全身の皮膚は、自分の物とは到底思えないくらい、何をするにもとてつもない気力が必要だった。腕を少し上げるのも、指一本動かすのさえしんどい。

レイはそういう訳で、ついに地面に突っ伏してしまった。竜人がすかさず、先ほどどこからか持ってきた布地を横に敷き、即席の寢床に寝かす。

レイが無防備な体勢になると、すぐ黒竜はその後ろへと回り込み、尻を捉えた。室内での作業が多かったからであろうか、丸々としていて、ほどよく脂肪の乗った肉厚な尻。白くて形も整っていた。加えて先ほどの丹念な焦らしと媚薬が作用して、十二分に完熟しているから、女のそれと見まごうほどである。なるほど竜が発情するのも無理はない。黒竜の肉棒が今、細長い先を穴にあてがう。そして腰を前に出す。レイは意味のある言葉を発することができなかった。嬌声でもない、ただくぐもった声をあげて、自らが竜の女役をしていることをただ理解させられる。さらに深く入り込む。どんどんと直径が太くなっていくために、それにあわせて尻穴も開く。

「あぐっ」

苦痛ではない。中が押し広げられる強烈な圧迫感と、これ以上の快楽に浸ってしまったらという恐怖が声を出させた。竜の媚薬の効果は非常に甚大なようで、いまや自身の腕ほどの大きさの太さをすっかり咥え込んでいる。

「んっ、ぐ、んあ、あ、あゝ」

腰が引かれる。腰が打ち付けられる。その繰り返しは刹那的な快感ではなく、連綿と繋がっていて、蓄積していく。媚薬によって増幅されるのは、前立腺をマラで潰されるたびに沸き起こる感覚的な刺激のみではない。でなければ、この下半身の脱力感や胸を締め付けるような気持ちは、なんと説明をつけられよう。体だけでなく、

心の奥底から変えてしまっているのだと、レイは身をもって実感した。白竜も、もう一度快楽を得ようと、そのそそり立った一物をレイの口元に差し出す。背後から突き上げられる強烈な快楽の力を少しでも発散させて逃がそうと、無我夢中でしゃぶりつくした。これには竜も腰を少しくねらせて、心なしか瞼を細めたようだった。そうして白竜の瞳を見つめていると、以心伝心してくる気がした。手も使え。感じた意思そのままに、上半身を支えていた両手でしごきなら、なお竜の欲望の塊を慰めんと、口での刺激も忘れない。

「んう`う！」

いきなり背後から猛烈な衝撃を受けた。その情熱的な行為にやっかんだか、黒竜がついにその長大な陰茎をすべて入れ込んだのだ。竜にとっては入れたというただそれだけのことだが、レイにとってはまさしく槍で体内を貫かれたとでも言えるもので、無意識に上半身を大きく上に反らす。下半身は地面にへたりと付いてしまったが、これで動きを止める黒竜ではない。むしろ尻が固定されたことでより身勝手に動くことができるという喜びから、益々その出し入れを早くしているようにすら感じる。

「んん、う`、ぐお`」

「すっごくそそられる声になってきたね、そのままもっとご主人のものに堕ちちゃいなよ」

「ん！ っんん！ ひっ！」

「んふふ、ここがいい？ そうだね、僕としたときにもすっごく敏感だったもんね？」

竜人がレイの上に跨がりながら、レイの乳首をすりすりとする。すると、青年はさらに艶やかな声を上げるようになったが、もはや上半身を支える力もなくなろうとしていた。しかし、何かに抱きついていたい。そうでないと、狂ってしまいそう。壊れてしまうのが

怖い。その一心で、白竜の巨きな腰に手を回して、がっちりと掴んだ。鼻腔いっぱい、竜の体臭がひろがる。頭がくらくらする。かぐわしくも野性的な汗のにおい、それから目の前に生える生殖器のなまぐさいにおいとが合わさって、頭脳が幻惑された。

「ほらやっぱり、もうつまめるくらいにたってきたよ？ 乳首、好きなんだ？」

「んんゝ～、んゝっ！」

粒のようだった彼の乳首は、いつの間にかぶくりと蕾のように膨れ上がっていて、食欲に快感を得よう得ようと必死だった。そこを力任せに潰されると、黒竜の暴力的な抽挿に加えて、さらに腹の中が締まる。視野すべてを埋め尽くす白竜の体と生殖器、そして淫靡で官能的なおい、味、柔らかさ。すべての要素が彼を発情させ、いままでずっと膨れ続けてきた胎内の快感が、炸裂した。

「あっ、ぐ、ひい、やめ、て……、な、なんか、くる」

言い終わらないくらいで、とげとげしい衝撃が全身を襲った。頭上に稲妻が落ちたのかというほどに、あまりにすさまじい快感で、レイは背筋を目一杯逸らして、体の芯から絶頂した。中がこれでもかというほどに収斂して、黒竜のモノを二度と放したくないかのように締め上げた。低いうなり声とともに、黒竜も、その締め付けに誘われ、子種を流しこみ、腹の中を黒く染めあげる。

レイは絶え間ない射精の痙攣をかすかに感じながら、一度意識を手放した。

「……んあ」

しとしと降りしきる雨音と下半身から来る拍動が、ゆりかごのような心地よさをもたらす。布地のようにふかふかとしたこの感触は、白竜がみずからの体を折りたたんだ上にのっているからだった。気

を失っていたレイは、この肉布団の上のまどろみにいつまでも身をゆだねていたかったが、眠るにはあまりに「快樂」が強い刺激だった。

先ほど黒竜が大量に種付けをしていて、今は白竜に、うつ伏せの状態に犯されている。

そう知れたのは、もちろん目の前に黒竜と竜人がいるからでもあるが、もはや見なくてもわかるほどに、あたえられる感覚の質が先ほどとはあまりに違うのだ。たしかに強烈すぎる刺激には変わりなかったが、その抽挿は、竜だけの動きによるものではない。ゆっくりと腰を回すようにして、腸と前立腺、膀胱、精囊などをじっくりとかき回されている。体が勝手にこの動きに呼応して、腹の底が下りてくる。

「んっ、はあ、んんんうっ、ぐ」

白竜の男根は、長大重厚な矢筒のような形をしている。先端からして根元と全く太さが変わらない。だから黒竜のそれとは違って、こんなにもじっくりと腰を打ち付けられているだけなのに、衝撃は同じくらい大きい。突き上げられる度に内蔵ごと押し上げられ、引かれるたびに肛門がめくりあげられるようだ。

「おまっ、え、え、もう、んっ、むりやあ、らめ」

白竜は、ただ腰をゆったりと揺らす。

どちゅん、どちゅん。

どちゅ、どちゅ。

その度に、レイの後孔はじゅぼじゅぼと貪欲な水音を鳴らし、普段は学術的な知識を扱うその頭脳を、桃色の快感に染め直す。

「ひ、んあ、ん、つく、ふん、ん」

言葉が出てこない。頭がふやけている。一突き一突きごとに、頭は思考回路をとろけさせ、体は快感以外の感覚を遮断する。温泉に

浸かったときの、何とも言えぬあの恍惚感に似ている。

今やすでに、レイは腰砕けの骨抜きである。度重なる竜の強烈な交尾と、メスの絶頂。頬はホオズキの如く紅潮し、引き締まった体は汗にぐっしょりとかがやき、乳首と男根は萎えることを知らない。黒竜と竜人が横で何か意思疎通しているようだが、よくわからない。あんなに雨が降っているのに、音も耳に入らない。

ただ、犯されたい。

「……おねがい」

必死に絞り出したかすれ声は、不安で今にも泣きそうな幼子のそれに似ていた。続く言葉は、白竜との、接吻。

竜はレイの顔も見えていないのに、心で感じ取ったのか彼を両手で器用に仰向けにして、大口を開ける。生暖かい微風が顔を覆う。

「あ……、ん` ほお！」

レイもとろけた口元をだらしなく開けるが、その瞬間、もはや体の一部のように感じていて男根を、尻から引き抜かれた

白竜の舌業は、やはり想像をはるかに超えていた。口内を蹂躪されているのに、頭の中を犯されているようだった。歯列に沿って歯茎を愛撫され、口内全体を犯されて、時に喉奥まで攻め入られるが、物足りない。

これだけでも絶対的に気持ちいいのに、レイの尻穴はぐっぽりと大穴をあけて大胆にヒクつく。それを煽るかのように、竜は一度口を離して彼の巨根がレイの性器と腹を覆いかぶさるように置かれる。とたんに、鼻を突く蠱惑的な臭いが脳天を貫く。雄の、生命感溢れる臭い。濃縮された野生の生殖本能そのものを、鼻腔だけで受け止められるはずがなく、尻が留守なのにもかかわらず、レイは一度、大きな声を上げてその後絶句した。

それでも饅えた男根の激臭は収まるはずもなく、ますます淫らに

乱れる。股を開き、両足を自らの腹のあたりまでもってくと、舌を出して雌犬のように熱い吐息をもらす。この状態のまま肉棒を迎えたらまずい。けど、いれてほしい。この日だけで二度も気絶させられている彼の体は、あと一度でも受け入れたらまた落ちることも知っていた。いや、もしかすると、無意識に体は落ちることを望んでいたのかもしれない。彼の、痺氣にあてられた頭脳を止めるために。

「きてくれ、また、ナカを――、ぐちゃぐちゃにして」

あの感覚を想像しながら懇願するだけで、涙やよだれが滝のようにあふれていた。ぐずぐずになった心身で絞り出した言葉は無事に届いたようで、じっくりと、その切先が侵入してくるのを感じる。感じながら、全てが入り切るまでに二度、甘く絶頂した。

どばん、どばん、どばん。

胸が快感で苦しい。頭が混乱で炸裂しそうだ。

下半身が絶頂感でどうしようもない。

もはや、かき回されているのが肛門なのか、脳みそなのか、心臓なのか、どう交尾をしているか、わからない。わからなくていい。下半身が、白竜の立派な「鉾」で貫かれているのが正解だとしても、感覚が全て溶けて一つになってしまえば、現実はどうでもいい。

「しゅ、し、しゅき、すき、すき。すきだ」

口から自然とあふれ出るその言葉。

「すき、すきっ、んん、んお」

白竜が全てを包み込んでくれる。今まで人生で受けた理不尽も、これから味わうであろう苦悩も、竜が時空を超えて包み込んでくれると、直感した。

レイは、起きながらにしてまどろんで、酔いながらにしてシラフで、喜びながら激情に駆られる、そんな矛盾する感覚に狂いそうに

なった。

だからせめて、

「すきだ、お前が、ああっ、私は、お前の、ものに……、なるっ」

芽生えた恋心をとめどなく放流する。その気持ちに呼応するように、竜は再び口を重ねてきたが、まだまだ恋は止まらない。目で、体で、顔で、においで。持てる全てで、愛をぶつけた。

恋に溺れ、快感に堕ちる。好きだ。この前の前の竜が、心の底から好きだ。気を失いそうな、黄金の快感の風に吹かれながら、全身の五感が際立つ。竜のすべてが入ってくる。絶対に放さない。体でも心でも強く抱きしめながら、竿と剛健な腰による種付けをすべて飲み干したい。

これまで終始無言だった竜から、断続的なうなり声が聞こえてくる。これから、自分の中に白い華を流し込まれる。それを感じて、骨盤が横に拓いていく。もう目は白目をむいて、四肢も舌もだらりと脱力してしまっているが、絶対に、それまで気を失えない。

言葉にならない言葉を呻き声に織り交ぜながら快楽に耐えていると、しだいに注挿が早まる。竿が一段と太さを増して、とてつもない圧迫で、前立腺の強烈な絶頂感が絶え間なく襲い掛かる。

じゅばんっ。

絶え間ない絶頂感と、体全体が吹き飛ぶような快楽。とろけそうなほどの恋心。体内で猛烈に膨れ上がった男根は、孕ませるための運動を始めた。

そして。

落雷が一筋。

今までほぼすべてが薄暗い闇に包まれていた洞窟の中へ、岩肌の些末な小穴まで光線が差し込む。

洞窟の壁一面には、首を後ろにそらして絶頂する竜と、少年とが

繋がる影がひと時写る。

青年は、外界から意識を遮断した。

「どうやら、選んだみたいです」

竜人が、影を覩て、そう言う。

竜人と黒竜は、去っていった。

◆第六章 「愛」

先日の嵐がもたらした青空は、嘘のようなすがすがしきであった。どうしようもなく広く、蒼海より蒼く、毛の一本一本まで見分けられるほど明るい。ここからは、その完璧な蒼穹のごく一部が見える。白竜のすみか——それはいずこかの水豊かな森にある。一方が崖、それ以外は背の高いスギやミズナラが鬱蒼と生い茂る。

あの日から、レイは白竜のつがいとなった。責められ続け、強烈な絶頂を幾度となく繰り返した反動から、ここ三日は寝込みっぱなしだったが、今ようやく立ち上がれるまでには体力も戻ってきている。食べ物皆竜が持ってきてくれた。生肉と、種々の果物と、魚。先ほどまで生きていてであろう血も滴るほどに新鮮な獣肉は、最初はみるだに身の毛もよだつ思いをしたものだが、竜のまねをして口に入れてみると、案外まずい物ではない。それどころか、火を通さない方がおいしいのではないかとも思えてきて……。そこでようやく、自らの体が少しずつ人間離れしていているのではないかという気を抱いた。竜人の言葉が思い起こされる。「竜はつがいを竜化させる」。その作用を持つのは中に大量放出される精液だろうか？ それとも、

「んあ……」

今こうして飲まされている、竜の舌から分泌される媚薬だろうか。

飲めば気持ちいい。飲めば嫌なことも忘れられる。

飲まされたということは、交尾が始まる。

レイは早くも、きゅうとつつましく締まったと思えば、いきなりくぼりと弛緩をしてしまう自らの穴に、恥じらいを感じた。密やかについた溜め息が、竜の首筋を跳ね返り、自らの首筋に当たった。竜はレイを仰向けに押し倒す。竜もその上に倒れ込むようにして、さらに舌を深くまで押し込む。もはや舌先は喉の奥底にまで到達していた。吐き出そうにも、その力強い舌を華奢な青年の喉の筋肉で押し出せるはずもなく、涎と涙を流しながら、ひたすら満足するのを待った。

ようやく舌を出した竜は、青年のみずみずしい顔を舐め尽くし、そのまま乳首を舌先で刺激する。つつましく小さな蕾のようだったそれは、今やあずきほどの大ぶりの突起に変貌している。

「ふー、ふうんあ！」

ねちっこく、何度も突起の上を往復するざらざらの舌。気付けば竜が、もう片方の乳首をその巨大な前足の爪先で、器用にいじくり倒していた。とても繊細な力加減で摘まんだり、そのままひっぱったり、或いはぎゅうと圧迫したかと思うと、いきなり手放して乳首を弾いたり。

「あ、あうっ、挿れて、くれないのか」

粒だった刺激に執拗に乳首を責め続けられて、レイはどうとう我慢できなくなって、自らの意志で、尋ねる。体も触れられてない時ですらビクビクとひくついて、竿に血がなだれこんだ。

それでも竜は素知らぬ顔でいまだ乳首を責めながら、青年の端正の取れた白い体を撫でまわす。その触りぶりは優しくも苛烈だった。我が子を愛おしむ母親のようでいて、肉を貪る肉食獣のようでもある。軽やかさのなかに潜む力強さに、もう体も心もうわずりを隠し

切れない。高鳴る鼓動が血を湧かせ、いつもより素早く巡る血は肌を紅潮させた。こぶりな彼の男性器もぴょこんと勃って、これから入れられるこの穴も、既に熟れている。今の彼には、気品ある青年の利口さや爽やかさはまるでなく、たおやかな人妻じみた凄艶さにあふれている。

「口づけ、して……、ほしい」

けだるそうに口を開ける。竜はその要求をおおらかに受け入れ、そっと舌をいれた。もはや口内が刺激されるだけで頭が働かなくなる。体が自由に動かず、体がどんどん火照りだす。もう限界だった。どうせ誰もいない。気持ちよくなるくらい、自由でいたい。

レイはゆるい接吻をしてもらっている自らの口元に右手を添えて、その淫水を手に取る。手のひらに十分まわりつかせると、自らの淫孔へとぬりたくった。

「ふっ、んん、はぁ……、ん」

いつかは絶対責められると知っている。存分に犯されてめっちゃにされる未来は見えている。でも、今はその感覚が一瞬でも早くほしいのだ。ついに自らの指を出し入れして、竜の男根の代替をこころみるが、どうもうまくいかない。気持ちいいことは気持ちいいが、物足りなかった。自分ではない他の存在の意思と、あの凶悪な形状と太さの肉棒から繰り出される快感が忘れられない。一度指を抜き取ると、後孔はだらしなくぐわと開ききっている。心ばかりか体まで準備万端なのに、なぜ犯してくれないのだろうか。

しびれをきらしたレイが、覆い被さる竜から這い出して、顔の前にお尻が来るような位置で仰向けになる。そのまま開脚し、自らの手で尻たぶを展いた。

「お願いだ……、この穴を、慰めてくれ。またあのときみたいに全力で犯してほしい。私をめっちゃくちゃに犯してほしい」

竜も、さすがにこの誘いを断るほどの堅物ではない。ゆっくりと近づいていき、大きすぎる前足で腰を鷲掴みにした。その力強さとこれから始まる行為への期待だけで、レイの腹の奥底はじわりと熱くなって、切なさを強く感じる。

「ひっ」

ほんの数日前まで、男を知らなかったこの体。この孔。それが今や、じわりとにじみでる先走りをぬちぬちと擦りつけられるだけで、排泄物の出口だったそこが、性器としての入り口に早変わりしていく。

「ん、んああ、は、はやく、しろお」

先端も根元もほぼ同じ太さの凶悪な剛直が、ほのかな力で肛門を押し開けるように当てられるが、少し開くと引かれる。そしてまた一から、ぐいと押されては、引かれる。そのたびにいちいち反応して、下半身と胸が熱くなるレイは、とうとう自ら腰を前後に振り始めた。思いがけない力によって、彼の下半身は大きく開き、かの肉棒を丸呑みしていった。

「んぎっ、あゝ、あ」

世界が一気に反転したような刺激的な快楽に甘く絶頂させられる。この感覚、これを体が欲していた。鋭くそそり立った男根で、肛門をめくり上げられ、ぐずぐずになった直腸を余すところなく摩擦される。

強烈な快感は相変わらずだったが、不思議と苦痛はない。竜化がすすみ、後孔が拡張されているのか——、何にせよいつの間にか、あの巨根を軽々受けいれている。じゅわじゅわと、乾ききった土に雨水が染み込むみたいだった。

「きっ、きたああ、はあ、ん、んっ、んぐお！ ふっ、おんゝ」

ナメクジのように、ぬるりぬるりとじっくり責めたてられる。腸

からの分泌液と竜の我慢汁がとろけあい、ぬちぬちと粘液じみた水音が周辺を支配する。

「おまえ、ん、がっ、お前を！！　僕が選んだんだ、だから……、いっぱい愛を注ぎこめよ、んお、っん」

そして、次第に性交の快感が、彼の心をも支配する。甘すぎてくどいくらいの、蜂蜜に似た快楽が、精神と体をじっくりと蝕む。

「はあ、はあ、んぐっ、はあああ」

強烈な刺激と絶頂感に頭が追いつくと、次第に興奮と愛の感情も心へ染み入ってくる。いつの間にか、ぴんっと小さく反り立った乳首を自ら慰めている。それでもまだ、足りない。

さみしい。彼の胸は、空虚だった。体はこんなにも満たされているのに。手に入れば手に入れるほど、もっともっと欲しい。

強烈な欲望が芽生え、渴望感に苛まれた。

「んあ！！　しはお、いへろ！」

大口を開けて舌の交わりを促す。赤子のようなわがままにも竜は母性じみた眼差しを向けると、コハク色のひとみでじっくりと視線を鷲掴みにして、そのままレイの口を滑るように奪った。

「んぐ、ん、ふぁ、あぐ、ふう、はぁっ、ん」

体を貪られている代わりに、竜の口を貪り尽くす。竜の唾液の、妙な甘さがクセになっていた。味わいながら、立派な鋭い牙ひとつひとつを愛するように口を愛撫する。行き場のない注挿と恋の刺激を、口で発散しているのだ。

それは愛情の印――愛の交換でもあった。夢中で奉仕した後、口を放すと舌と舌のあいだをつなぐ透明なつばの橋が、木漏れ日を乱反射していた。

どれくらいたったのだろう。さっきまでの朝日の少し冷やかな日差しは、気付けば昼下がりの温かみを帯びていた。

竜の肉棒は、いまだ後孔におさまっている。

もはやレイの意識は薄れに薄れ、理性は崩壊しているようだった。彼はただ、欲のままに動く。体裁、矜持、礼、恥、気品、それらすべてを捨て去り、心をも丸裸にして酔いしれていた。顔は涙と唾液でぐっしょり濡れている。汗だくの体はぬるりと光り、なまめかしい。

喘ぎ声もうつろだった。途切れ途切れのそれは、悪夢にうなされている時の声にも似ている。

「〜〜〜……！？！」

そして、頭の中に何かが炸裂した。あまりに強烈すぎるので、その状況を把握するのに時間がかかる。

声も出ず、ただその衝撃的な感覚がなくなるのを待つ。だが、その前に何が起きているかが目に飛び込んでくる。

レイは今、地面に仰向けの状態になっている竜の腹に乗っかる形で犯されていた。腹の上で、仰向けで、まぐわい始めてからずっと勃起しているそれが、自分の物とは思えないほど太く長く腫れ上がっている感覚がある。

その怒張の先からは、今もなお湧き出る温泉のように精液がほとばしり続けていた。「んおゝ！？ んんんあゝ あっ！」

頭で理解してしまっただけからは、その刺激が強烈な快感に変わって襲い掛かってくる。尻の穴はなお力強く犯され続け、前立腺は一定の間隔で圧迫され続けている。

一瞬、竜の尋常ではない量の精液が吐き出されているのではないかと思ったが、そんなことは不可能だし、そもそも竜はまだ射精していない。

そう、竜はまだ射精していないのだ。つまりこの快感が少なくともまだしばらくは持続することになる。

どぶ、どぶっ、びゅるるる、と濃密な白濁が絞り出されるように発射されるたび、射精のあの気持ちよさが際限な襲ってくる。その度に、竿に血流が集まる。竿が固くなるたびにまた痺れるような絶頂感が全身を駆け巡って、ますます硬さを増す。

一度に発射する量もすさまじければ、質もすごい。純白でねばっこく、クツとするような栗花臭も強烈だった。股の筋力で瞬く間だけ打ち上げられたレイの子種は、ぼとぼと、ぬるくなってから肌に落ちる。

もうすでに、レイの肌も竜の腹も、白に染まり切っている。
「お` お` おおお` !　む` り` っむりいいいいん` んお` おおお` お」

度重なる絶頂に、レイの体はどういうことをきかなくなる。手足をバタバタと乱舞させて、腹の力も不規則に入ったり抜けたりする。竜は前足をつかって暴れる体をはっかり掴んだ。レイの快楽は終わらない。頭が快楽ではじけ飛びそうになる。唯一動かせる首を前後左右に倒し、体をくねらせることでしか、この怪物的な気持ちよさに耐えられない。

どぼんっ。

「ん` っ——がっ……!?!」

睾丸がこれでもかというくらい持ち上がる。全身が痙攣し、大きく背をそらす。恐らくものすごい量の白濁が、一塊になって打ち上げられたのだろう。すぐさま熱を持った一定の重みを腹に感じた。それがどんどん広がって、脇腹へとこぼれていく。

長い長い射精だった。その最後は、全身の細胞で絶頂するような感覚、極楽の極致としか言えないような、ありとあらゆる全ての気

持ちよさを一塊にしたようなものだった。顔も体も全身余すところなく何らかの液体でぐっしょり濡れている。途中で小便ももらしていたのではないだろうか。とにかくあらゆる体液がある。唾液、涙、鼻水、汗、尿、我慢汁、精液、腸液。

そしてそのどれにも似ているようで全くの別物であろう、竜の唾液。

神の雷鳴に打たれたような烈しすぎる快樂の余韻に浸りながらも、レイは猛烈なものの渴きを覚えた。呻きながらもなんとかそう訴えると、竜は唾液をのませてくれる。

飲みながら、自分はなぜ気絶しなかったのだろうと気付く。不思議だった。今までの自分では絶対に、耐えられなかったはずだ。自分は、何か変わってしまったのだろうか。

「んぐ、っ、はあ、はあ」

竜の舌が遠ざかっていく。もっと舐めていたかった。でも、それで拓けた視界には、これまた強烈すぎる現実が映った。

「なん、で……。嘘だろ」

屹立し続ける己の男性器が、まるで鬼の一物とでも言わんばかりに禍々しい姿に変わってしまっている。長さはゆうに三倍を超え、太さも二回り増している。周囲に張り巡らされた血管はひとつひとつが小枝くらい存在感を持っており、亀頭の形もなんだか妙だった。

名状しがたい不安を感じた。全身の汗が冷めてきて、寒気もある。動悸がする……。

「あっ」

「~~~~~」

地響きのような竜の低く鈍い声は、自分だけの、特別な子守歌だ。お腹の中にいる胎児が聴く、母親の体の音に似ている。そのまま竜はレイをしっかりと抱きしめた。白い羽毛が温かかった。

その拍子に竜の男根が抜かれた。ぽっかりと穴が開きっぱなしの肛門から、大量の液体が漏れ出る。気付かないうちに射精されていたのだ。それに呼応して、レイの心からも、色々と感情が漏れていた。

「……父は、厳しかった」

慧委はわかっていた。占星術師の宿命を。レイの祖父にあたる栄咫〈エイタ〉はその類まれなる星を視る力に加え、指揮の才もあった。酋長から任命され大穴町の次期酋長にも任命されるほどの人望があったが、ある時重大な見落としをした。それによって町は大規模な天災に見舞われ、栄咫はその責任を死罪によって償うこととなった。

レイを抱きかかえ、命からがら逃げ延びた慧委は、出生を隠して八千侯に潜り込み、その才能を開花させて地位と名誉を獲得した。

占星術師の失敗は、死なのである。だからこそ、父はレイにたいして異様なほど厳しくしつけてきた。

レイは何度もぶたれた。難解な書物を読み誤るたびに平手打ちをされ過ぎて、腫れた頬を幾度となく噛んだ。

人付き合いもそうだ。人望があれば殺されまいと、父はあらゆる階級の人と死に物狂いで友好関係を結んだ。それをレイに強要した。

それでもレイは人に真心から優しくされた記憶がない。

許嫁とは二度会ったが、形式上のやりとりしかできなかった。

「あたたかい」

悲しくないのに、涙が何度も目なじりからこぼれる。胸の中で、色んな感情がぐるぐる巡り続ける。頭はあまりに長い時間強い快感に晒され続けて、疲弊していた。

「優しいな。お前は」

その言葉に、竜は首を持ち上げてそっと振り返って、レイの額に口づけした。また、竜がごろごろと低い声をあげて、それがとても心地いい。

愛するものの体にうもれて、レイは静かに眠りについた。